9

高校進学で離村する中山間地域の中学生が感じた離村前後の思い

―離村経験者の語りから―

大野理恵[1)]・長鶴美佐子[1)]・長友　舞[1)]

key words：高校進学，中山間地域，思い，離村経験者，語り

Ⅰ．はじめに

中山間地域の中学生は，心身の変化が大きい思春期に，高校進学のために保護者のもとを離れるため，離村前の健康支援の必要性が高いが，これらを検討する上での研究は西頭ら[1)]の意識調査等があるのみで数少ない。この状況を踏まえ，我々は，離村を余儀なくされる子どもたちの健康支援の現状と課題について教員[2)]，保健師[3)]，保護者[4)]の視点からその一端を明らかにした。「しかし，より効果的な健康支援を検討するには離村する当事者の視点が必須であるにも関わらず，これまで，離村経験者自身の体験談や考えが日常的に離村する中学生やその保護者などに口伝えされるのみで，これらを研究的な視点で分析したものは皆無に近かった。初めて保護者の元を離れ新たな環境への適応が求められる「離村」はいわば心身の危機状態といえ，その後に大きな影響を与えると推測される。したがって離村する当事者が「離村」の前後にどのような体験をし，どのようなことを感じ考えたのか，その思いを明らかにすることは健康支援検討の上で貴重な示唆を得ることができると考えた。

そこで，本研究では，離村経験者の語りから離村前後に抱く思いを明らかにすることを試みた。この離村経験者が当時を想起し客観視しながら語る「思い」は，印象に残るほど強く感じた思いとも捉えることができ，離村を余儀なくされる中学生やその保護者等の支援に関する貴重な示唆を得るとともに離村時の思いを一般化する上では有益な語りと考え研究に取り組んだ。」

Ⅱ．目　　的

離村経験者の語りから，高校進学で生じた離村前後の思いを明らかにし，中山間地域の思春期健康支援を検討する。

Ⅲ．方　　法

研究デザインは半構成的面接法を用いた質的帰納的研究である。研究対象者はA県の中山間地域3ヶ所の村民で，思春期に保護者の元を離れ生活をした経験のある者27名（男性14名，女性13名）で，平均年齢40±SD11歳（年齢幅20歳～57歳）であった。データ収集は平成30年3月～8月に行った。対象者のリクルートは，村役場の協力を得て対象者募集のポスター提示と文書配布により行った。調査内容は，進学先の場所や生活拠点の種類等の背景，離村前後に抱いた思いと，離村後で戸惑ったことや困ったことなどである。分析では，まず録音されたインタビュー内容を逐語録にし，離村前後の思いが語られている文脈をデータとして抽出しカテゴリー化を行った。なお，カテゴリー化においては研究者間で一致を見るまで検討を重ねた。

本研究で扱う中山間地域は，「A県の地域振興条例第2条[5)]に該当する村で人口3000人未満の村」とし，思春期健康支援を「思春期の子どもたちの健全な成長発達を促すための，思春期の特徴や心身の変化を踏まえた様々な健康支援」と用語の操作的定義をした。

なお，本研究は大規模研究の一部をまとめたものである。

Ⅳ．倫理的配慮

本研究の趣旨と研究への参加協力及び撤回の自由の保障，対象者の匿名性およびプライバシーの保護，データは本研究の目的以外には使用しないこと，研究成果の公表等を文書及び口頭で説明し，書面にて同意を得た。なお，本研究は宮崎県立看護大学研究倫理委員会（承認番号第14号）の承認を得て実施した。

おおの　りえ　1）宮崎県立看護大学

V．結　　果

以下，カテゴリーは【　】，サブカテゴリーを＜　＞で示し，離村経験者の語りであるデータを*「斜字」*に表した。（　）は研究参加者の語りの意味を理解しやすいように，研究者が文言を補足したものである。

1．離村前の思い

22データ，5サブカテゴリーから離村経験者が離村前に抱いた思いは【不安もなく楽しみ】【不安】【アンビバレント】の3つのカテゴリーが生成された。

1）【不安もなく楽しみ】（13データ）

離村経験者は，離村前において特に＜何も戸惑わない＞で，むしろ＜ワクワクした気持ち＞で離村する事を受け入れていた。

「早く出たかった。楽しみで。やっぱり田舎だから町に出たい，町への憧れっていうのでわくわくしてました。」

「身内がいるという安心感もあり，同じように村出身の人もいたので・・・そこまで寂しいとかはなかった。」

2）【不安】（6データ）

一方で，離村経験者は，親元を離れて自立して生活することを想像して＜日常生活力に対する不安＞や，初めて体験する寮生活や大人数の中での生活に＜新たな人間関係構築に対する不安＞を感じていた。

「今思えば人間関係ですね。先輩とかがいたのでそこをうまく作ることが最大のあれ（不安）だった。」

3）【アンビバレント】（3データ）

また，中には新生活への不安と楽しみが混在する＜アンビバレントな気持ち＞を抱く者もいた。

「不安と楽しみ。」「不安はあったんですけど，5つ年上の姉が同じようにM市の方の高校に進学して寮生活している姿を見ていたんで自分も大丈夫かなって。」

2．離村後の思い（表1）

表1　中学生の離村後の思い

カテゴリー	サブカテゴリー	データ
困りごとのない楽しい生活	困ったことや不安等はない	あんまり依存がなかったから（不安や困りごとなど）そこ辺は別に（ないです）、はい。
		そういった心配とか不安はなかったような気が…。
	楽しい離村生活	（親元を離れることが）嬉しかったっていうか、好きな時に勉強できて、本が読めて、何か自由に自分の時間が使える・・・私は嬉しかった記憶しかないんです。
		下宿自体も楽しかったですし、家に・・ホームシックになるとかいう事はなかったですね。
		高校は逆に中学校の生活が楽しかったんで、楽やなって。何もかも、自分でできるし。
		もう叔母と一緒にアパートにいたので、ちょっと寮生活とかがわからないから。やっぱ、母の妹と住んでいたのでちょっと安心する部分がありました。
		下宿だとそれ（不安など）があんまりなかったので、結構、開放的というかですね。
		（楽しいと感じたのは）中学校の規則が結構しっかりしてるので、高校に行って規制が緩いと感じてしまって。
		（高校に）入ってからは、寮の子たちが、うちのクラスにおって、同じクラスで。最初は寮の子たちと一緒にいたんですよ。だから安心してて。（中略）中学校より楽しかった。
		実際に離れてみると、ホームシックとか、ありがたさがわかって、さみしさも感じたことはあるけど、その時はわくわくが先、嬉しいの方が大きかったと思います。
孤独感	知らない人ばかりの環境での孤独感	なかなか知ってる人がいないっていうのは最初は淋しい。
		最初は知らない人ばっかりだったから・・・慣れるのに時間がかかりましたね。
		確かに最初の頃はこう孤独感みたいなものはありましたよね。それはもう当然です。
		友達…同級生が誰もいないので。そこはやっぱ（寂しかったです）。
		高校に行ったときに同級生が一人もいない（中略）寂しかったですね
	ホームシックになった	ホームシックは、あったと思う。けどみんなあることだからなと思って。
		最初の頃は、ホームシックのような感じに・・・。やっぱ離れたので。
		振り返ると自分の方が、まあ、帰りたいから迎えに来てというのが多かったような気がします。自分は結構帰りたいときは連絡していた。
	村出身ということへの劣等感	学校生活の中で、最初は村出身と言う事はあまり言いたくなかった。
プライバシーの確保の困難感	共同生活への戸惑い	自分だけで生活しているのではないので、（中略）いろいろ意識しなきゃいけないし。
		寮とか共同生活とか、そういうの経験していないんで。大変だったかなって。
		ずっと毎日（人が）いるからですよね。最初の方はやっぱり、友達ができて、一緒に寝泊まりできる友達ができてと思うんですけれど、一年とかたつと、相手の嫌な所とか、プライバシーがゼロじゃないですか？思春期なら（特に嫌でした）。
		寮生活で同部屋になる子といつも一年間一緒にいたりたまに息苦しくなったりもあった。
	プライバシーのない寮生活への戸惑い	寮生活で、お風呂に入る時とかは大浴場だったんで誰かしら一緒に入ったりするから・・・すごく違和感があって、いやだなーと言う時もあった。
		下着とか干すのも、おんなじ部屋の子と生活しているので・・（違和感があった）。
文化・価値観の違いへの戸惑い	異性との付き合い方へのカルチャーショック・戸惑い	（経験してない男性との遊びの場では）背伸びしてついて行かなきゃみたいな・・・。
		真面目で来てたのかな。だからお酒を飲むとか夜にみんなで男の子の家とかそういう所に行くとか。それはいけない事じゃない、真面目だよって感じの方で見てたので。
		付き合ってる子が多くてびっくりした。
		あー、そういうの（高校生での妊娠・中絶）あるんだなってびっくりした。
		あぁ別格の人なんだみたいな感じで、別にその人たちを悪く思うとかそういうのではなくて、あ、あの人たちはそういう風におませさんなんだって。
		やっぱり田舎者と言う感覚があったから・・・やっぱり町の子優いな、（性的な面で）進んでるなじゃないけど。
		高校でそういう（合コン等）演奏に行っちゃうと、やっぱ高校生と専門学校生での3年間の気持ちの成長はあると思うから高校生だと余計に刺激がおっきいのかなって。
	先輩・後輩関係への戸惑い	うんまあ、先輩後輩とか最初は（大変だった）・・・。
		先輩が厳しいとか寮則をちゃんとしなきゃいけないとか、覚えなきゃいけないとか・・・。
	文化の違いにおどろいた	文化の違い、カルチャーショックですよ・・・。（電話器など）。
		いろんな子いるし、ヤンキーな子もいるし。（中略）いろんな子がいて。
		同級生たちが色んなこと知ってますね。色んな情報持ってますから。見るもの聞くものすごいんですよね、そっちの方でした。音楽にしろ、色んな事にしろ。
	価値観の違いによる戸惑い	カルチャーショックじゃないですけど出身地を出てなんか考え方が違うんだと。価値観が。
		ギャップで。もうちょっと自分が思い描いていたイメージとそこの中の現実のイメージが、ちょっと違ってそこで、あ～何かやる気無くなったなってところがあったのですね。
小集団から大集団へ適応することへの戸惑い	新たな人間関係構築への困難感	人間関係がうまくいかなかったですね。最初とかうまくいかなくてですね。苦労しました。
		なかなか自分からどうやって話していったらいいんだろうとか、周りはいっぱいその知ってる人たち、同じ中学校から来てる人たちが沢山いるけれども、自分たちは2、3人とかになってしまうので・・
		小さい中で友達作るって言っても、ずっと同じように育ってきて、わざわざ友達を作らなくてもいいところだった。高校にいったら、自分から友達を積極的につくっていかないと。大きいコミュニティでは。まあ、そこがあの、ちょっと苦手だったかなって思います。
	少集団から大集団への戸惑い	実際に行ってからの方がいろんなギャップ、先輩後輩の事とか。やっぱクラスが今まで20人とかくらいから40人くらいのクラスになって（ギャップが大きかった）。
		人数の多さで最初戸惑いましたね。
		（寮のにぎやかさが）そっちの人間関係の方が面倒くさかったですね。
自分自身を律する気持ち	自律の必要性を感じる	高校での生活は特に気をつけてはいました。自分の事は自分で、できるように。
	他者に流されないように気を付ける	（妊娠・中絶の話を聞いても）でも自分は気を付けようって。
		（性病とかの）相談受けてたんですけど、へ～ぐらいしか思わないようにしていた。
		（性的な事を聞いても）自分は、気をつけようと思った。気持ちしっかり持たないとって。
日常生活力の乏しさを補感	金銭管理経験の乏しさ	お金を計画的に使うという事を知っていればよかったかなって思った。
	家事への不慣れ感	中学校に入った時はさすがに洗濯とか自分でやることがちょっと最初は、慣れるまではちょっと大変だった。
		いろいろ身の回りのことは自分たちでしないといけないことになったから、そういう部分が（大変だった）。

※データの（　）は研究参加者の語りの意味を理解しやすいように、研究者が文言を補足した。

52データ，17サブカテゴリーから，7つのカテゴリーが生成された。離村経験者は，離村後に【困りごとのない楽しい生活】を過ごしながらも【孤独感】や【プライバシーの確保の困難感】を抱いていた。また，村での生活とは異なる大人数との初めての関わりにおいて【文化・価値観の違いへの戸惑い】や【小集団から大集団へ適応することへの戸惑い】を感じ，他者に流されぬようにと【自分自身を律する気持ち】やうまく身の回りのことができないために【日常生活力の乏しさを痛感】していた。

1)【困りごとのない楽しい生活】（10データ）

離村経験者の中には，<困ったことや不安等はない><楽しい離村生活>を送った者もおり，自分の時間を自由に使える開放感を抱く者もいた。

「そういった心配とか不安はなかったような気が…。」

2)【孤独感】（9データ）

離村経験者は，初めて親元を離れて<知らない人ばかりの環境での孤独感>を感じたり，<ホームシックになった>り，中には中山間地域の<村出身ということへの劣等感>を抱く者もいた。

「高校に行ったときに同級生が一人もいない（中略）寂しかったですね。」

3)【プライバシーの確保の困難感】（6データ）

初めての寮や下宿生活で<共同生活への戸惑い>を感じ，思春期の多感な時期に体験する大勢との共同生活で生じる<プライバシーのない寮生活への戸惑い>を感じていた。

「寮生活で，お風呂に入る時とかは大浴場だったんで誰かしら一緒に入ったりするから・・・すごく違和感があって，いやだなーと言う時もあった。」

4)【文化・価値観の違いへの戸惑い】（14データ）

中山間地域の村での生活とは異なり，電話器など日常生活で使用する物が異なるなど<文化の違いに驚いた>り，これまでとは異なる大人数との関わりの中で生じる<先輩・後輩関係への戸惑い>や物事に対する<価値観の違いによる戸惑い>，そして，初めて耳にする恋愛関係の話においては，<異性との付き合い方へのカルチャーショック・戸惑い>を抱いていた。

「文化の違い，カルチャーショックですよ・・・。（電話器など）。」「やっぱり田舎者と言う感覚があったから・・・やっぱり町の子凄いな，（性的な面で）進んでるなじゃないけど。」

5)【小集団から大集団へ適応することへの戸惑い】（6データ）

また，離村経験者は，進学先の生徒の人数の多さや寮の賑やかさに驚き，そこに面倒さを感じるなど<小集団から大集団への戸惑い>を感じていた。また，離村経験者の多くが村から単独で進学していたため，意図的に新たな交友関係を構築する必要性があったことから<新たな人間関係構築への困難感>を感じていた。

「人数の多さで最初戸惑いましたね。」

6)【自分自身を律する気持ち】（4データ）

離村経験者は，初めて大人数の考えに触れ，恋愛における経験値の違いや人間関係の複雑さを目の当たりにして<他者に流されないように気をつける>，また，日常生活の自立のみならず自分自身の襟を正すためにも<自律の必要性を感じる>などの思いを抱いていた。

「（性的な事を聞いても）自分は，気をつけようと思った。気持ちしっかり持たないとって。」

7)【日常生活力の乏しさを痛感】（3データ）

そして，自分の事は自分で行わなくてはならないという初めての状況に<家事への不慣れ感>を感じるとともに，村では体験できなかった<金銭管理経験の乏しさ>を感じる者もいた。

「いろいろ身の回りのことは自分たちでしないといけないことになったから，そういう部分が（大変だった）。」

「お金を計画的に使うという事を知っていればよかったかなって思った。」

Ⅵ. 考　　察

1. 離村前の思い

今回明らかになった離村経験者の離村前の思いは，【不安もなく楽しみ】【不安】【アンビバレント】など3つに分類することができた。

「楽しみ」とした者は親元を離れて新たな環境で生活できることへの楽しみ等をその理由に挙げており，その思いの裏には，中山間地域では進学に伴う離村が習慣となっていること，また，離村先には身内や知り合いがいることが安心感につながっていた。

一方，「不安」とした者はその理由を日常生活力としており，具体的には初めて親元を離れて生活する事への心配や，自分で身の回りの事ができるかという不安であった。また，限られた人間関係の中では幼少期から互いをよく知り，人間関係を新たに構築する必要性が少ない環境で育った者が，人間関係構築や自立した生活の必要性を考えたときに「不安」を抱いたと考えられた。さらに，幼少期から年代を超えた親密性の高い環境で育った者にとっては，新たに接する先輩後輩といった上下関係に戸惑いも大きかったのではないかと考える。

また，新生活に向けて楽しみと不安の「アンビバレント」な思い抱くことは進学等で親元を離れる一般の中学生にも共通するものであり，中山間地域の子ども達特有の反応とは言えないだろう。しかし，限られた狭い社会の中で育ったという子ども達の特徴を考えれば，離村後に抱くアンビバレントな思いはより強いと考えられた。

以上より，離村前の生活が離村することへの受け止め方に大きく影響することが示唆された。

2. 離村後に生じた思い

初めて親元を離れて生活するため，日常生活における自立度が高かった離村経験者は，離村後を【困りごとのない楽しい生活】と捉えていた。このことは，離村後の生活に備えた日常生活の準備性が高いと離村後の生活へのポジティブなイメージを持つことができ，それ故，余裕が生まれ，親元を離れたとしても開放感としてその状況を楽しむことができたのだと考えられた。

しかし，一方では，【孤独感】や【プライバシーの確保の困難感】を抱くものもいた。【孤独感】については，進学で親元を離れ寮や下宿生活となる中学生であれば一般的に誰にでも生じる思いであると言える。しかし，小集団でかつ親密な人間関係の中で育った中山間地域の子供たちにとっては特に強く感じられる思いであろう。また，【プライバシーの確保の困難感】は，これまで家族の中で生活してきた者が限られた空間で初めて他者との生活を余儀なくされる中で，プライバシーを意識し始め，その確保の必要性と困難さを感じたことから生じた思いであると考えられた。

さらに，【文化・価値観の違いへの戸惑い】を抱いていたことも，これまでの限られた地域の人間関係の中では経験し得ない考え方や経験の多様性に初めて触れたためであり，人間関係の拡大とともに【小集団から大集団へ適応することへの戸惑い】も同様に生じたと考えられる。中山間地域の中学校教員や保健師が，子供たちの異性に対する意識の低さ，人間関係構築力やコミュニケーション力の未熟さを感じていることが報告されている[2) 3)]。離村後の不安や戸惑いが生じる背景にはこのような特性が影響していると思われた。

一方で，性的関心が高まり，他者と同じ価値観や経験を共有したいとピア・プレッシャーを受けやすい思春期に他者の意見に流されまいと【自分自身を律する気持ち】を抱いていた離村経験者の思いは，過疎地の思春期の子ども達が「仲間からの誘いや影響に対し断りたい，ピア・プレッシャーに打ち勝つ方法やスキルを身につけたい」という欲求を持っていたという西頭ら[1)]の報告と同様の結果を示していた。

そして，【日常生活力の乏しさを痛感】した背景には，村ではまとまった金銭を使う場所や機会が少なく，自分で金銭管理した経験が乏しかったため「計画的にお金を遣う」経験の必要性を感じるなど，これまでの生活が離村後の思いに影響したと推測された。

以上より，離村経験者の抱いた「小集団から大集団へ適応することへの戸惑い」や「自分自身を律する気持ち」等の思いは生活環境の大きな変化により生じたものであり，保護者や教員等が必要性を指摘し懸念していた「大集団と関わる力」や「人間関係構築力」[2) 3) 4)]と同様のものであり，離村前の人間関係構築力や日常生活力，自律心が離村後の思いに強く影響することが推測された。また，世代を超えても同様の思いを抱いていたことから，これらの思いは現在の中山間地域の子ども達にも通じることとした上で小集団から大集団へと生活環境の大きな変化を意識した支援の必要性が示唆された。さらに，中山間地域と合わせて思春期という時期にも着目した支援が必要と考えられた。

なお，本研究の対象者は村に居住する離村経験者であり，年齢幅が大きいことや時代背景が様々で想起についても限界があるものの，その思いの一端を明らかにできたことは今後の支援に活用できると考える。しかし，今回の研究対象者は現在とは時代背景が異なる状況下での体験であるということを認識しておくことは必要であり，情報環境や技術の発達は中山間地域にも大きな影響を与えてきたことを考えると，今後このことを視野にいれた支援や研究が求められる。

Ⅶ. 結　　論

離村経験者が離村前に抱く思いは「楽しみ」「不安」とこれらが混在する「アンビバレント」な気持ちに分類された。また，離村後の思いは，「孤独感」や「文化・価値観の違いへの戸惑い」「自分自身を律する気持ち」など小集団から大集団への適応に関する大きな環境の変化に関連したものであった。

なお，本発表に関し開示すべき利益相反はない。

引用文献

1) 西頭知子，佐々木くみ子，末原紀美代：若者の性意識・性行動におけるピア・プレッシャーおよびメディアの影響と性の健康教育について，北海道教育大学紀要教育科学編，61（1），p.303-312，2010.

2) 長友舞，長鶴美佐子，坂元夏美，他：中山間地域の中学生の現状と思春期健康支援における課題―中学校教員への半構成面接から―，第50回日本看護学会論文集（ヘルスプロモーション），p.159-162，2020.

3) 大野理恵，長鶴美佐子，長友舞，他：保健師が捉える中山間地域の中学生への思春期健康支援の現状と課題，第50回日本看護学会論文集（ヘルスプロモーション），p.155-158，2020.

4) 長鶴美佐子，坂元夏美，大野理恵，他：思春期の子どもの離村で生じた中山間地域の保護者の不安と対応，第50回日本看護学会論文集（ヘルスプロモーション），p.151-154，2020.

5) 宮崎県（平成23年），宮崎県中山間地域振興条例，平成29年9月15日閲覧，https://www.pref.miyazaki.lg.jp/chusankanchiiki/kense/kekaku/documents/45142_20190710185316-1.pdf.